

punḍarika

ぷんだりーか

宗教教育ガイドブック

令和5年度版



経本も掲載していますので、大切に取扱って下さい。

表紙タイトルの説明

梵語の pundarika のことで、芬陀利華(ふんだりけ)と音訳する。

蓮華の一種で白い花を意味する。泥の中に生じて清浄な花を開くところから煩惱に汚れない清らかさに喩える。転じて仏のこと、念仏の行者、信心の人などの意味に用いる。

表紙・挿絵デザイン：梶生 彩奈

(兵庫大学短期大学部 美術デザイン学科第一部卒業生)

■はじめに

学校には様々な形態があります。私立学校の存立の根本には建学の精神があり、そこでこそ私立学校の存在理由と教育の特色を存分に発揮することができます。

本学は学校法人睦学園を母体とし、聖徳太子の示された「和を以て貴しと為す」を基本とする、仏教に基づく大学です。また龍谷総合学園（浄土真宗本願寺派の学校グループ）の加盟校でもあります。建学の精神を基盤として、変わりゆく時代や社会に向かって教育を展開する使命があります。

教育の目的は人の育成、人格の完成にあるといえます。皆さんには、本学が長年大切にしてきた建学の精神を学び、正しく理解し、そこに主体的にかかわっていただきたいと思います。建学の精神を学び会得していく中で、ゆたかな心をもった、まことの人になっていただきたいのです。

このような観点から、まず第一歩としてこの冊子を作成しました。

本学では建学の精神の充実と具現化に取り組んでいます。皆さんの積極的な参加を願っています。

学園訓

互譲

寛容

感謝

建学の精神

聖徳太子の御徳を慕い、
その十七条の憲法に示された
「和」を根本の精神として
仰ぎ、仏教主義に基づき
情操教育をおこなない、
有為の人材を養成することを
目的とする。

■学校法人 睦学園の歴史

- 大正 10(1921)年 聖徳太子薨去 1300 年祭を記念して、鶴崎規矩子先生が「太子日曜学校」をはじめる
- 大正 12(1923)年 6 月 10 日、須磨太子館を建設、太子館附属高等裁縫部を創設
- 大正 15(1926)年 須磨幼稚園を設置
- 昭和 12(1937)年 財団法人須磨太子館を設置 須磨睦高等実践女学校
(現、兵庫大学附属須磨ノ浦高等学校)を設置
- 昭和 22(1947)年 学制改革に伴い須磨ノ浦中学校を併設
- 昭和 26(1951)年 法人名を学校法人睦学園に改称
- 昭和 29(1954)年 睦学園幼稚園教員養成所を設置
- 昭和 30(1955)年 睦学園女子短期大学(保育科第二部)を設置
- 昭和 37(1957)年 短期大学に保育科第一部を増設、保育科第二部を廃止
- 昭和 41(1966)年 短期大学にデザイン科・食物栄養学科・家政学科を増設
神戸市須磨区から加古川市に移転
短期大学名を兵庫女子短期大学に改称
- 昭和 42(1967)年 兵庫女子短期大学附属加古川幼稚園を設置
- 昭和 42(1968)年 短期大学に勤労学生を対象とした昼間二交替制の家政学科第三部を増設
- 昭和 45(1970)年 短期大学に初等教育学科を増設
- 昭和 46(1971)年 短期大学に保育科第三部を増設
- 昭和 48(1973)年 須磨ノ浦中学校を休校
- 平成 3(1991)年 短期大学の家政学科第一部・同第三部を生活科学科第一部・同第三部に改称
須磨ノ浦中学校を再開、校名を神戸国際中学校に改称
- 平成 4(1992)年 短期大学に専攻科(1 年課程)美術デザイン専攻・食物栄養専攻・生活科学専攻を設置
短期大学の専攻科食物栄養専攻学位授与機構認定
高倉台キャンパス完成、神戸国際中学校を移転
- 平成 5(1993)年 短期大学の専攻科美術デザイン専攻学位授与機構認定
- 平成 6(1994)年 神戸国際高等学校を設置

平成 7(1995)年 兵庫大学(経済情報学部経済情報学科)を設置

平成 8(1996)年 短期大学の初等教育学科を廃止

平成 10(1998)年 短期大学名を兵庫大学短期大学部に改称
短期大学附属加古川幼稚園名を兵庫大学附属加古川幼稚園に改称

平成 11(1999)年 兵庫大学大学院経済情報研究科(経済情報専攻)を設置

平成 13(2001)年 兵庫大学健康科学部(栄養マネジメント学科・健康システム学科)を増設
健康科学部栄養マネジメント学科管理栄養士養成施設指定認可

平成 14(2002)年 短期大学部に美術デザイン学科第三部を増設
短期大学部の食物栄養学科、生活科学科第一部、生活科学科第三部を
廃止
専攻科美術デザイン専攻(2年課程)を増設
専攻科美術デザイン専攻(2年課程)大学評価・学位授与機構認定
専攻科(1年課程)美術デザイン専攻・食物栄養専攻・生活科学専攻を
廃止

平成 15(2003)年 短期大学部に専攻科保育専攻(2年課程)を増設
専攻科保育専攻(2年課程)大学評価・学位授与機構認定

平成 16(2004)年 須磨幼稚園名を兵庫大学附属須磨幼稚園に改称

平成 17(2006)年 兵庫大学健康科学部に看護学科を増設
健康科学部看護学科保健師学校、看護師学校指定認可

平成 20(2008)年 兵庫大学生涯福祉学部(社会福祉学科)を増設

平成 21(2009)年 短期大学部の専攻科美術デザイン専攻(2年課程)廃止

平成 22(2010)年 短期大学部の美術デザイン学科第三部を廃止

平成 23(2011)年 短期大学部の美術デザイン学科第一部を廃止

平成 25(2013)年 兵庫大学生涯福祉学部にくども福祉学科を増設

平成 26(2014)年 短期大学部の専攻科保育専攻(2年課程)廃止
須磨ノ浦女子高等学校名を兵庫大学附属須磨ノ浦高等学校に改称

平成 28(2016)年 兵庫大学現代ビジネス学部(現代ビジネス学科)を増設

平成 29(2017)年 兵庫大学看護学部(看護学科)を増設

令和 2(2020)年 兵庫大学大学院現代ビジネス研究科現代ビジネス専攻(修士課程)
を増設
兵庫大学大学院看護学研究科看護学専攻(博士前期課程・博士後期課
程)を増設

令和 5(2023)年 兵庫大学に教育学部(教育学科)を増設
学校法人睦学園創立 100 周年

■聖徳太子（聖徳太子の思想）

聖徳太子（厩戸皇子、厩戸王）は 574 年、用明天皇の皇子として誕生されました。聡明であったことから厩戸^{うまやどの}豊聡耳^{とよとみみのみこ}皇子という名でも知られています。聖徳太子は大乗仏教を大切に日本をひろめようとされた第一人者であり、「和国の教主」とも呼ばれます。経典をよく読み、仏徳を讃嘆され、高句麗^{こくりに}の僧惠慈や百済からも僧を招いて仏教を学ばれました。

父の用明天皇、叔父の崇峻天皇が相次いで亡くなり、聖徳太子は伯母の推古天皇の摂政となります。その後「三宝興隆^{さんぼうこうりゅう}の詔^{みことり}」を発して仏教普及の基礎を敷かれました。「三宝興隆の詔」は、仏・法・僧を大切にするという仏教の基本原則を示しています。さらに国政の刷新にも務められ、冠位十二階の制定や遣隋使の派遣などを敢行されましたが、その基底には仏教精神がありました。

604 年、「十七条憲法」が制定されます。第一条の冒頭にある「以和為貴」ということばには、仏教精神に基づき「和」を大切にしようという聖徳太子のお心が表れています。このことばは本学の建学の精神です。聖徳太子は、仏教を取り入れ「和」の精神を勧め、その後の日本史や仏教史に大きな示唆を与えられました。

■建学の精神

建学の精神には教育の理念から人間形成に至る大学の方針が貫かれています。

本学の建学の精神は、聖徳太子が「十七条憲法」に示された「和」です。「和」は、「十七条憲法」の第一条「以和為貴（和を以て貴しと為す）」にあることばです。聖徳太子は「和」の実現のため仏教の大切さを説いておられます。それが第二条「篤^{あつ}く三宝^{さんぼう}を敬え」であり、三宝、つまり仏、法、僧を大切に、自らを見つめていくことでもあります。兵庫大学には開学時から教育理念の基本に仏教がありました。

建学の精神を具体的に表すことばとして兵庫大学には学園訓である「感謝」

「寛容」「互譲」が掲げられています。生かされていることへの「感謝」、あらゆるいのちを優しく受け入れ大切に共に生きていく「寛容」、そして互いを思いあいながら助け合っていく「互譲」です。これらが建学の精神の具体的な行動規範となっています。

聖徳太子は自身を深く見つめられた方でもあります。「十七条憲法」第一条には「人皆^{たむらう} 黨^{さど} あり、また達れる者少なし」、第十条にも「人皆心あり、心おのおの執るところあり」「我必ずしも聖にあらず、彼必ずしも愚にあらず、共にこれ凡夫のみ」とあり、人間のありようと我執の実態を見つめて、凡夫ということばを示されています。こうした自身への深い洞察は、鎌倉時代の親鸞聖人^{しんらんしょうにん}にも通じるものがあるでしょう。

本学は聖徳太子を大切にされた親鸞聖人(1173-1263)を宗祖とする浄土真宗本願寺派の関係学校です。親鸞聖人は聖徳太子を深く敬慕され、凡夫という概念を厳しく自身の問題として考えた僧でもあります。親鸞聖人は自身を内省し、その上で仏の大きな願い(本願)と大きなやさしさにうなずかれていきました。本学の礎を築いてくださった鶴崎先生や河野先生ご夫妻は、親鸞聖人のひらかれた浄土真宗の教えに大変ご縁の深い方々でもありました。これら多くのご縁をいただいていた本学は、浄土真宗本願寺派関係学校が集う龍谷総合学園に加盟し、ともに建学の精神の具現化に向かって協力しています。

■睦学園の設立に携わった3名の先生方



つるさき きくこ 先生(1860-1941)

長崎県諫早市の安勝寺の娘として生まれ、鶴崎平三郎氏と結婚。平三郎氏は整腸剤を発明した医学者で、兵庫県立姫路病院の院長となり、結核専門サナトリウム「須磨浦療病院(現在の須磨浦病院)」を開院し、夫婦で須磨に移り住みます。大正10(1921)年、規矩子先生は、聖徳太子薨去1300年祭の記念行事として、須磨在住の有志らと共に千守町に「太子日曜学校」を開きます。そして、聖徳太子の「和」を大切にして多くの子どもたちを育まれました。



こうの げんそう 先生(1899-1980)

広島県出身。京都で勉強の後、僧侶になり現光寺(神戸市)代務住職を務められる。大正12(1923)年に須磨太子館館長に就任された後は、戦前・戦後にかけて睦学園の高校・幼稚園・短期大学の設立と発展に熱心に取り組まれ力を尽くされました。著書『我をおいて誰ぞ』には建学の精神への思いや教育に対する先生の考えが記されています。



こうの センヨ 先生(1897-1991)

広島県出身。裁縫の技術を身につけ須磨に來られて河野厳想先生と結婚。須磨太子館附属高等裁縫部でご活躍されるなど本学の発展にご尽力されました。思惟館を寄贈して下さった際、「和」の精神の中心として生かして頂きますなら、これに過ぎるよろこびはありません」とのメッセージを残されています。

聖徳太子の和の精神を大切にしたい情操教育を目的とし、須磨区^{ちもりがわ}の千守川のほとりに設立されたのが「太子日曜学校」です。当時日曜学校には 300 名を超える子どもが集まりました。

大正 12(1923)年に須磨区^{みゆきちょう}の行幸町に移転し、ヨーロッパ風の独立校舎「須磨太子館」が建てられ、同年 6 月 10 日、須磨太子館に太子館附属高等裁縫部が創設されました。睦学園創立記念は、この日(6 月 10 日)を記念して制定されました。令和 5(2023)年、睦学園は創立 100 周年を迎えます。

■ 100 周年スローガン

「和の力で、環を創る。」

睦学園は建学の精神を大切に、地域の教育機関としてこれまで歩んできました。次の 100 年に向かって、和の精神を礎に、未来をみんなと共に考える環(わ)をつくり進んでいきます。

■ 100 周年シンボルマーク

和の力で、環を創る。

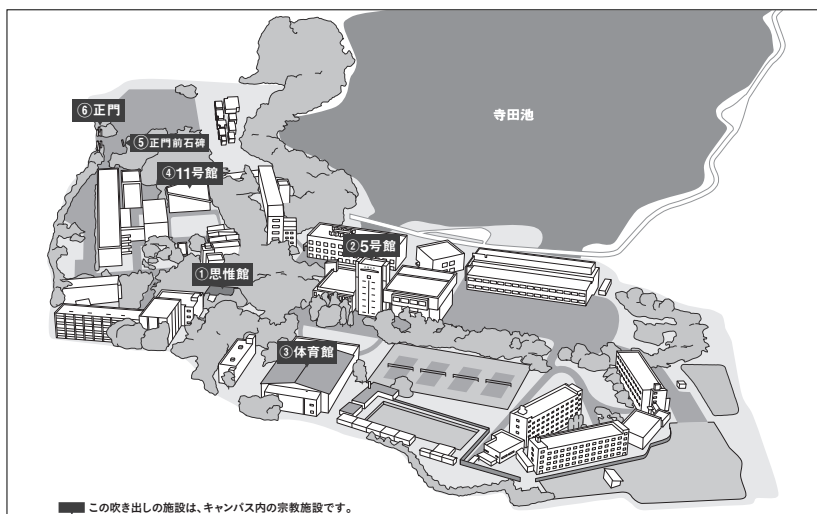


「1」は人を、「0」は和を表し、「和」を育む人を養成する睦学園の建学の精神を表現しています。

■ 100 周年記念事業

100 周年を記念し、記念講演会、100 字メッセージコンテスト、「100」に関する作文コンテスト、応援ソング制作など多くの記念事業が実施されます。

■建学の精神に関連する学内の施設



① 思惟館 (15 号館)



昭和 48 (1973) 年、河野センヨ先生より
 礼拝の中心となる場所として寄贈されました。『顕浄土真実教行証文類 (教行信
 証)』の「五劫思惟之摂受 重誓名 声聞
 十法」から思惟館と名付けられました。正
 面には名号入りの法輪が置かれ、正面左
 に鶴崎規矩子先生の肖像、右に河野セン

ヨ先生の像、後方にはお釈迦様(ブツダ)の生涯を描いた釈迦八相図(仏教伝道
 協会寄贈)があります。外の石碑には河野厳想先生の「思惟館」の文字、建物入
 口には中村了蔵^{りようぞん}教授の「思惟館」の文字が掲げられています。現在は定例礼
 拝、宗教セミナーが行われています。

② 5 号館（河野記念館研修室）、3 階仏間（研修室）



睦学園創立 60 周年、短期大学開学 30 周年の記念行事として昭和 59（1984）年に完工されました。3 階の研修室は浄土真宗のご本尊である阿弥陀如来像をご安置する仏間です。仏壇上部の扁額には本願寺派 24 代即如門主の揮毫である「真実明」の字があります。



「真実明」^{しんじつみょう}は、仏間に掛けられている扁額（横に書かれた額）に書かれたことばです。龍谷山本願寺（西本願寺）の第 24 代即如門主（1945-）の揮毫であり、親鸞聖人の『浄土和讃』にあります。

智慧の光明はかりなし
有量の諸相ことごとく
光暁かふらぬものはなし
真実明に帰命せよ
『浄土和讃』

（意訳）

阿弥陀仏（阿弥陀如来）のみ教えははかりしれないほど大きなものであって、凡夫であるわたしたちすべてに、その広く深い仏さまの教えが届けられています。ですから仏さまの大きなはたらきに帰命（おまかせ）しましょう。

③ 体育館



昭和 57(1982)年、河野厳想先生の三回忌を機縁として河野センヨ先生より寄贈されました。中央に南無阿弥陀仏とある「法輪」と、左右に日本画家山口吉旺氏による壁画「和」があります。壁画には、推古天皇と聖徳太子を中心にすべてのいのちが互いに睦あっていくという生命の共感が表現

されています。最後にはセンヨ先生自身が加筆されました。建学の精神への思いが込められた絵画となっています。体育館では入学式や卒業式が行われています。

④ II 号館 201 教室



昭和 58(1983)年に河野センヨ先生より寄贈されました。ステージ奥の中央には名号入り法輪があり礼拝ができるよう整えられています。現在は入学時のオリエンテーションや花まつり法要等が行われています。

⑤ 正門前石碑



桜の木の下に石碑があります。石碑には河野厳想先生がお書きになった「以和為貴」の文字が刻まれています。大学を訪れるみなさんに建学の精神の大切さを示しています。

⑥ 正門の 4 本の柱



仏の世界を 4 つの方向から守る四天王（持国天、増長天、広目天、多聞天）をあらわしているといわれています。聖徳太子は四天王を大切にされておられたということです。

■ 仏教行事

本学では次のような行事を行っています。積極的に参加しましょう。

・ 入学式、卒業式（修了式）



仏式で行います。献灯・献花・献香の後、「三帰依文」「さんだんのうた」「恩徳讃」などを唱和します。入学式は 4 月 3 日、卒業式（修了式）は 3 月 23 日に行われます。

・ 定例礼拝



毎週水曜日 12 時 15 分から思惟館で行われています。音楽礼拝です（礼拝の次第は 16 ページ参照）。合掌・礼拝の後、「三奉請」「さんだんのうた」「念仏」「回向」をおまいりします。看話では教職員や学生による幅広いジャンルのお話を聞き、最後に

「恩徳讃」を歌います。参加自由ですので、念珠と「ぷんだりーか」を持ってお集まりください。

・花まつり法要《灌仏会》



お釈迦さまの誕生(4月8日)を祝います。本学では月遅れの5月に行います。お釈迦さまはルンビニの園で誕生されました。誕生された時に甘露の雨がふったことから、花まつりでは誕生仏に甘茶をかけます。学生や教職員、附属加古川幼稚園の園児、一般の方も参加してレクリエーションや講演が行われます。

・宗教ツアー



睦学園にゆかりのある京都の寺院や仏跡、文化施設等を訪ねます。「兵大京都学」履修生、自由参加の学生、教職員が参加し、建学の精神への理解を深め、自らのあり方を見つめなおす機会となっています。

・宗教セミナー



建学の精神を教職員、学生、一般の方により深く知っていただくために開催されます。講師をお招きし、仏教に関するお話をいただきます。当日は教職員や学生、一般の方々にも開放し、様々な年代の方が集まってお話に耳を傾けます。

・^{じょうどうえ}成道会フォーラム



お釈迦さまがさとりをとおひらきになった成道会（12月8日）に近い、12月第2水曜日に毎年開催されます。睦学園の各部門の宗教担当者が集まり、現状の課題や問題点を明らかにし、建学の精神の浸透に向けた話し合いを行います。また、次年度のテーマに関する協議も行われており、毎年ここで決定したテーマに沿って宗教教育を推進していきます。

■^{らいはい}礼拝について

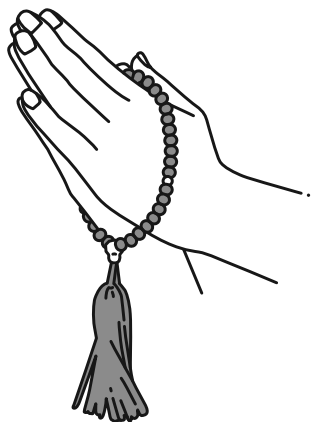
本学では毎週礼拝を行っています。自由に参加してください。

礼拝の意味：礼拝は仏教では「らいはい」と読みます。仏教の読み方は呉音を多く用いています。礼拝とは、自分の欲望を願ってその目的を叶えるための手段や要求する祈りではありません。仏徳を讃嘆し、仏さまのご恩に感謝することが礼拝です。仏さまを尊び、「お礼をする」ころでお参りしましょう。

■^{ねんじゅ}念珠

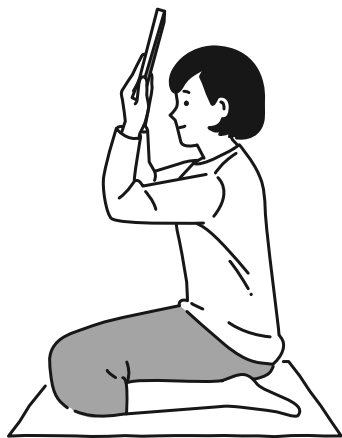
入学の際にお渡しします。

念珠は数珠とも言い、古来インドでは、念ずる輪とされ珠を繰りながら仏を念じていたようです。念珠は、心を落ち着かせたり、仏の名を称える際に数を取るのに用いられ、一般に広まりました。礼拝の時は必ず持つようにし、念珠は畳や床に直接置かないようにしましょう。



礼拝の時は左手に持ちましょう。合掌、念仏、礼拝の時には、両手の親指以外の4指を念珠に通して、房が下になるように持ちましょう。

■経本、経典



お経や仏教讃歌の楽譜が入っています。
 経本は大切ですから床や畳やじゅうたんに直接置かないようにしましょう。
 経本を開くときは、胸の前で経本を持ち、額の高さまで持ちあげ、いただいてから開きます。読むときは経本を開いて両手の親指と人差指の間に挟んで、合掌するように持ちましょう。閉じる時も、経本を閉じてから丁寧にいただきます。

■合掌



合掌は仏や菩薩を敬い礼拝する礼儀作法です。合掌する時には手のひらをあわせて両手に念珠をかけ親指で軽く押さえ10本の指を伸ばします。

合掌をしたら念仏を称えましょう。念仏とは仏をおもうことという原意があります。本学では南無阿弥陀仏を称えることをいいます。南無とは仏さまに全ておまかせするということです。

■礼拝



礼拝します。礼拝は合掌をしたまま上体を45度前に傾けてからゆっくりと元の姿勢に戻します。

定例礼拝

・導師または調声がひとりで唱える
(同) 一同が唱和する

さんぶじよう

「三奉請」二打

ぶじようみだによらい

・奉請弥陀如来

ぶじようしゃかによらい

・奉請釈迦如来

ぶじようじつぼうによらい

・奉請十方如来

にゆうどうじよう

(同) 入道場

さんげらく
散華樂

にゆうどうじよう

(同) 入道場

さんげらく
散華樂

にゆうどうじよう

(同) 入道場

さんげらく
散華樂 三打

「さんだんの歌」

一、光かがやくかおばせよ

はのお

矣ともえてあきらけく

みいずかしこくきわもなし

ひと

等しきもののなかりける

二、月日の光かげかくし 宝の玉のかがやきも

すみ

みなことごとくおおわれて さながら墨のごとくなり

三、世自在王のおんすがた 世に超えましてたぐいなく

せじさいおう

さとりのみこと高らかに あまねく十方に響くなり

よも

ひび

一打

たんねんぶつ

「短念仏」

なまーんだーぶー

・南無阿弥陀仏一打

なまーんだーぶー

(同) 南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏 一打

えこう

「回向」

がんにしくどく

・願以此功德

(同) 平等施一切

どうほつばだいしん

同 焚香授心

おうじようあんらつこく

往生安樂国 三打

さんだんのうた

♩=96 明るくおちついて

讃 仏 偈 意識
伊藤完夫 作曲

B^b E^b B^b E^b B^b
 1. ひ か り か か や く か お ば - せ - よ み
 2. つ き ひ の か か り か け - か - し た
 3. せ じ ざ い お う の お ん す - が - た よ

$F7$ B^b7 Gm E^b B^b $F7$ B^b
 い ず か - し - こ く き わ - も な し ほ
 か ら の - た - ま し て か た が - や き し み
 に こ え - ま - し の た ら い な く さ

Gm $F7$ B^b Gm F B^b
 の - お と も え て あ き - ら け く ひ
 な - こ と ろ ん と く お か - わ れ て さ
 と - り の み こ と た か - ら か に あ

E^b B^b E^b B^b $F7$ B^b
 と し き も の の な か - り け る
 な が す み の の ご か - く な り
 ま ね く よ も に ひ と く な り

恩 徳 讃

Moderato ♩=76 穏やかに

親鸞聖人 和讃
清水 脩 作曲

D Em D A
 によ ら - い だ い ひ - の お ん ど - く は

D G A D G D
 み を - こ に し て - も ほ う ず - ベ し

Em D Bm A D A
 し し - - ち し - き の お ん ど く も -

$E7$ A D G Gm D
 ほ - ね を く だ き て も し ゃ す べ し

花祭りの歌

井上賢順 作詩

大中寅二 作曲

♩=96 かわいらしく明るく

♩=96

G D G G C D7 G

1. やーま とれ し まね に さ き い で し
2. あーわ ねは し まちと せり そ の か み に
3. とーき は は ちる な り ち は お う ど

G D G C D7 G

はーな の さ ま ま つ み そ え て
あーめ と ち ち と ま ゆ そ し て
こーこ に み お し え い や さ か え

G D G G C D7 G

いーま し よ そ え る は な み ど う
わーま し ぞ の こ よい を す く う ベ う
はーな も わ ら い て と り う た う

G D G C Am7 G D7 G

たーた す ほ と け の と と う と さ よ
きーう の ひ と け り の と あ う ま し ゆ え
きーう の み ま つ り の と あ ま い わ え

ねん
念

ぶつ
仏

D.Hunt 編曲

合奏

C G7 C F C F C C G C

な も あ み だ - - - あ み -

G7 C C G7 C F C F C

- だ な も あ み だ - - -

C G C G7 C C F C G7 C

あ み - - だ な も あ み だ ぶ つ

きょう らい もん
敬 礼 文

調声人にあわせて合掌

合掌したまま調声人が独唱する



さん き え
◇三 帰 依

仏・法・僧という仏教の三宝に帰依することを述べたものです。パーリ語で書かれた原文は世界の仏教徒共通の文章です。

ブッダーン	サラナーン	ガッチャーミ	自ら仏に帰依したてまつる
Buddhaṇ	Saraṇaṇ	Gacchāmi.	
ダンマン	サラナーン	ガッチャーミ	自ら法に帰依したてまつる
Dhammaṇ	Saraṇaṇ	Gacchāmi.	
サンガン	サラナーン	ガッチャーミ	自ら僧に帰依したてまつる
Saṅghaṇ	Saraṇaṇ	Gacchāmi.	

さん き え
三 帰 依



真宗宗歌

真宗各派協和会 作詩
島崎赤太郎 作曲

♩=69 心をこめて

Chords: D A D F#m D D A

1. ぶ か き み の り に あ い - ま つ る み
2. と わ の や の み よ り の す わ - ね な し く み
3. う み の う ち と の へ だ - て な し く み

Chords: D G D A D

の さ ち な に に た と - う べ き ひ
の さ ち な に に た と - う べ き ひ
お さ ち な に に た と - う べ き ひ

Chords: Bm A#dim Bm A D A E7 A

た す ら み ち を き - き - ひ ら - き ま
く す ら み ち を き - き - ひ ら - き ま
が は ら か なら に つ - え つ - つ つ よ

Chords: D G D G D A7 D

こ と の み む - ね い た - だ か - ん
の と な り わ - い い そ も - だ か - ん
く に の た り び - を と も - だ か - ん

三、

二、

一、

真宗宗歌

ふかき^{のり}み法に あいまつる
身の幸な^{のり}に たとうべき
ひたすら道を ききひらき
まことの^{むね}み旨 いただかん

とわの聞より すくわれし
身の幸な^{のり}に くらぶべき
六字の^{なづかい}み名を となえつつ
世の生業^{なづかい}に いそしまん

海の内外^{うちと}の へだてなく
み仏^{おの}の徳の とうときを
わがは^{みくに}らからに 伝えつつ
浄土^{みくに}の旅を とともにせん

しゅう 会
衆 会

羽田野 仁 作詩

平井康三郎 作曲

♩=72 おごそかに

C G C C F C G

1 こ の に わ に あ つ ま る わ れ ら
2 み す が た は こ こ ろ に う つ り

C C7 F C Am Em D7 G

よ の わ ぎ の し な こ そ か わ れ
み お し え は い の ち に か よ う

C G7 C F C F C G

も ろ と も に め ぐ み に と け て
わ れ ら い ま や み よ り さ め て

C F C Am Em D7 G

む つ み あ う こ こ ろ の こ え に
み ほ と け の ひ か り の な か に

C C7 F Dm7 D7 C G7 C

さ ん ぶ つ の う れ し き し ら べ
の り を き く た の し き つ ど べ

衆 会

一、この庭に あつまるわれら
世のわざの しなこそかわれ
もろともに めぐみにとけて
むつみあう こころの声に
讃仏の うれしきしらべ

二、みすがたは こころにうつり
み教えは いのちにかよう
われらいま 闇よりさめて
みほとけの ひかりのなかに
法をきく たのしきつどい

兵庫大学のうた

～未来を求めて～

滝田常晴 作詞
湯山昭 作曲

Bossa nova (♩=126ぐらい)

C *mf* C[#]dim Dm Dm7 G7 G9 C

1. な に を も と め て ひ と は い き る か か ざ す
2. ゆ め が あ る か ら ほ し は い き ら め く か か わ す

E^bdim Dm7 G7 C *mp* Dm

ひ か り を さ が し も と め て い な み の に く
こ と ば を さ が し つ つ け て は て も な く

B7 Em F G G7 C *mf*

な が れ る か ぜ に だ れ が た し か に よ ん で い る き み が い て
ひ ろ が る さ ら に み ら い は た し か に よ ん で い る

C[#]dim Dm *mp* D[#]dim C[#]E F F6

ぼ く が い て あ た ら し い み ら い き を ひ ら く
ぼ く が い て あ た ら し い み ら い き を ひ ら く

Dm *f* D[#]dim C[#]E Dm7 G7 C CM7 C6 C

あ た ら し い み ら い き を ひ ら く
あ た ら し い み ら い き を ひ ら く

C CM7 C6 C **Coda** C7 *f* FM7 C *mf* C[#]dim

ひ 上 こ だ い が く き み が い て ぼ く が い て

Dm D[#]dim C[#]E Dm7 G7 C CM7 C6 C

あ た ら し い み ら い き を ひ ら く

Memo



●願がん
以に
此し
功く
徳どく

同音
びよう
どう
せ
いっ
さい

平等施一切

同どう發ほつ菩ぼ提だい心しん

○ 往おう 生じょう 安あん 楽らく 国こく

ほねをくだきても
謝^{しゃ}すべし

●ほとけのみ名を聞きひらき

こよなき信をめぐまれて

よろこぶこころ
身みに得うれば

さとりかならず
さだまらん

出音ハ調ミ

●南無阿弥陀仏
同音ナミ

南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏
○南無阿弥陀仏

次第にゆつくり

等此最勝尊
斯願若剋果
大千応感動
虚空諸天人
当雨珍妙華
○

●南無阿弥陀仏
同音ナミ

南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏

●如来大悲の恩徳は
同音ナミ

師主知識の恩徳も
身を粉にしても報ずべし
○

このみほとけにかよわん
ああこの願い遂ぐべくば
あめつちためにうちふるい
天つもろびと虚空より
妙なる花をふらさなん
○

願 ^{がん}	通 ^{つう}	如 ^{によ}	得 ^{とく}	願 ^{がん}	具 ^ぐ	供 ^く	説 ^{せつ}	常 ^{じょう}	広 ^{こう}
我 ^が	達 ^{だつ}	仏 ^{ぶつ}	為 ^い	慧 ^ね	足 ^{そく}	養 ^{よう}	法 ^{ほう}	於 ^お	施 ^せ
功 ^く	靡 ^み	無 ^む	三 ^{さん}	悉 ^{しつ}	衆 ^{しゅ}	一 ^{いっ}	師 ^し	大 ^{だい}	功 ^く
慧 ^え	不 ^ふ	碍 ^げ	界 ^{がい}	成 ^{じよう}	徳 ^{とく}	切 ^{さい}	子 ^し	衆 ^{しゅ}	徳 ^{どく}
力 ^{りき}	照 ^{しょう}	智 ^ち	雄 ^お	満 ^{まん}	本 ^{ほん}	仏 ^{ぶつ}	吼 ^く	中 ^{じゅう}	宝 ^{ほう}

功徳の宝 ほどこして
 つねに群れいる 人々に
 獅子吼ゆるごと 法とかん
 よろずの仏を たたえつつ
 すべての徳の もとそなえ
 ねがいも智慧も 満ちみちて
 世にたぐいなき 雄者たらん
 師のみほとけの 無碍の智慧
 照らさぬくまの なきがごと
 わが いさおしの 力また

為 ^い	天 ^{てん}	日 ^{にち}	威 ^い	功 ^{こう}	通 ^{つう}	閉 ^{へい}	滅 ^{めつ}	開 ^{かい}	広 ^{こう}
衆 ^{しゅ}	光 ^{こう}	月 ^{がつ}	曜 ^{よう}	祚 ^そ	達 ^{だつ}	塞 ^{そく}	此 ^し	彼 ^ひ	濟 ^{さい}
開 ^{かい}	隱 ^{おん}	戦 ^{しゅう}	朗 ^{ろう}	成 ^{じょう}	善 ^{ぜん}	諸 ^{しよ}	昏 ^{こん}	智 ^ち	衆 ^{しゅ}
法 ^{ほう}	不 ^ふ	重 ^{じゅう}	十 ^{じつ}	満 ^{まん}	趣 ^{しゅ}	惡 ^{あく}	盲 ^{もう}	慧 ^え	厄 ^{やく}
蔵 ^{ぞう}	現 ^{げん}	暉 ^き	方 ^{ほう}	足 ^{ぞく}	門 ^{もん}	道 ^{どう}	闇 ^{あん}	眼 ^{げん}	難 ^{なん}

法 ^の	月 ^{つき}	み	さ	い	い	よ	よ	め	智	わ
の	日 ^ひ	い	と	ト	ト	き	こ	し	ち	ざ
蔵 ^{くら}	も	は	ト	ト	ト	く	し	の	え	い
を	た	ト	ト	ト	ト	め	の	ト	な	と
開 ^{ひら}	めに	十	開	かん	の	道	間	を	を	遠
き	隠	方	そ	の	の	た	う	ひ	を	に
て	れ	に	の	ト	ト	ち	ち	ら	を	除
は	なん	か	ト	ト	ト	ふ	や	て	を	か
		が	ト	ト	ト	さ	ぶ	は	を	な
		や	ト	ト	ト	ぎ	り	は	を	ん
		きて	ト	ト	ト					
		て	ト	ト	ト					
		は	ト	ト	ト					

消 ^{しょう}	普 ^ふ	神 ^{じん}	為 ^い	志 ^し	淨 ^{じよう}	離 ^り	誓 ^{せい}	究 ^く	名 ^み
除 ^{じょ}	照 ^{しょう}	力 ^{りき}	諸 ^{しよ}	求 ^ぐ	慧 ^え	欲 ^{よく}	不 ^ふ	竟 ^{きよう}	声 ^{しょう}
三 ^{さん}	無 ^む	演 ^{えん}	天 ^{てん}	無 ^む	修 ^{しゆ}	深 ^{じん}	成 ^{じよう}	靡 ^み	超 ^{ちよう}
垢 ^く	際 ^{さい}	大 ^{だい}	人 ^{にん}	上 ^{じよう}	梵 ^{ぼん}	正 ^{しやう}	正 ^{しやう}	所 ^{しよ}	十 ^{じつ}
冥 ^{みやう}	土 ^ど	光 ^{こう}	師 ^し	道 ^{どう}	行 ^{ぎやう}	念 ^{ねん}	覺 ^{かく}	聞 ^{もん}	方 ^{ほう}

欲 ^{よく}	あまねく	不思議 ^{ふしぎ}	世 ^よ	ほとけ	智慧 ^{ちえ}	けがれ	誓 ^{ちか}	もし	その名 ^な
といかり	闇 ^{やみ}	の力 ^{ちから}	のろび	の道 ^{みち}	もてき	をのぞき	てきとり	至 ^{いた}	は十方 ^{じふぱう}
とおろ	の世 ^よ	かが	の師 ^し	にさ	よき	正念 ^{しやうねん}	え	ら	に
かさ	をて	やきて	ならん	さげ	行 ^{ぎやう}	と	ま	きこ	えなん
の	す	て	ん	てぞ	おさめ	し	あ	な	

重誓偈

髮二声〇〇 出音ハ調ミ

●我建超世願

必至無上道

斯願不滿足

誓不成正覺

我於無量劫

不為大施主

普濟諸貧苦

誓不成正覺

我至成仏道

ちかいのうた

●われ世に超えし願をたて

たぐいなき道さとらん

このねがいもしみたざれば

誓いてさとりえざらまし

われはてしなき末かけて

大きめぐみの主となり

貧しき群を救わずば

誓いてさとりえざらまし

われ仏の道さとりえば

■重誓偈（じゅうせいげ）

『仏説無量寿経（ぶつせつむりようじゅきよう）』の上巻にある讃歌（さんか）で、「ちかいのうた」は意識です。

はるか昔に仏とられた阿弥陀如来（あみだによらい）は、すべての苦悩の人びとをすくうため法蔵菩薩（ほうぞうぼさつ）として現れ、世に越えた四十八の願い（本願）をおこされました。

そして、苦しみ悩む人びとを迷いの海からすくい出し、南無阿弥陀仏（なまあみだぶつ）の名号（みようごう）にこめられた心を伝えることができれば、決して仏にはならないと、重ねて誓われています。

出音ハ調ミ

●南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

出音ハ調ミ

●願以此功德

平等施一切

同發菩提心

○往生安樂国

●南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏 南

●如来大悲の恩徳は

身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳も

ほねをくだきても謝すべし

●ほとけのみ名を聞きひらき

こよなき信をめぐまれて

よろこぶころ身に得れば

きとりかならずさだまらん

忍^{にん} 我^が 諸^{しよ} 仮^け 知^ち 常^{じよう} 智^ち 十^{じつ} 力^{りき} 発^{ほつ}
終^{じゆ} 行^{ぎやう} 苦^く 令^{りやう} 我^が 令^{りやう} 慧^え 方^{ほう} 精^{しやう} 願^{がん}
不^ふ 精^{しやう} 毒^{どく} 身^{しん} 心^{しん} 此^し 無^む 世^せ 所^{しよ} 於^の
○ 悔^け 進^{じん} 中^{ちゆう} 止^し 行^{ぎやう} 尊^{そん} 碍^げ 尊^{そん} 欲^{よく} 彼^ひ

○ し^のの^はは^みげ^みみて 悔^くい^ざら^んん
ね^がが^い果^はさん^ん その^の日^ひまで
苦^く難^{なん}の^の毒^{どく}に 沈^{しず}む^もとも
道^{みち}を^を求^{もと}めて^て た^とい^い身^みは
わ^がが^ここ^ろろ^ろざ^し み^みそ^そな^なわ^わせ
つ^ねね^にあ^あわ^われ^れみ^み た^たれ^れた^たま^まい
智^ち慧^えさ^さわ^わり^りな^なく お^おわ^わし^しま^ます
十^じ方^{ほう}の^のみ^み国^{こく}の^の ほ^ほと^とけ^けた^たち
果^はし^しと^とげ^げば^ばや この^の誓^{ちか}い
わ^われ^れつ^つと^とめ^めつ^つ は^はげ^げみ^みつ^つ
○

是^ぜ 幸^{こう} 快^け 已^い 心^{しん} 十^{じつ} 度^ど 我^が 而^に 国^{こく}
我^が 仏^{ぶつ} 楽^{らく} 到^{とう} 悦^{ねつ} 方^{ほう} 脱^{だつ} 当^{とう} 無^む 如^{にょ}
真^{しん} 信^{しん} 安^{あん} 我^が 清^{しょう} 来^{らい} 一^{いつ} 哀^{あい} 等^{とう} 泥^{ない}
証^{しょう} 明^{みょう} 穩^{のん} 国^{こく} 淨^{じょう} 生^{しょう} 切^{さい} 愍^{みん} 双^{そう} 洹^{おん}

わが誓^がい^{ちか}かく^く まことなり^ニ
師^しよ願^ねわ^がくは^く あかしあれ^か
永遠^{とわ}のたのしみ^の うけしめん^め
国^{くに}のまどい^のの安^{やす}らけ^けく^く
心^{こころ}悦^{よろこ}び^び きよらにて^に
十^{じゅう}方^{ほう}のさとより^り きたるもの^も
世^よのもろびとを^を 救^{すく}わなん^な
われあわれみを^を ほどこして^{して}
ひとしくならぶ^らものぞなき^き
さともしずけ^けき^き この国^{このくに}よ^よ

道^{どう} 其^こ 国^{こく} 令^{りよう} 威^い 如^{によ} 徧^{へん} 光^{こう} 無^む 復^ぶ
場^{じよう} 衆^{しゆ} 土^ど 我^が 神^{じん} 是^ぜ 此^し 明^{みよう} 数^{しゆ} 不^ふ
超^{ちよう} 奇^き 第^{だい} 作^さ 難^{なん} 精^{しやう} 諸^{しよ} 悉^{しつ} 刹^{せつ} 可^か
絶^{ぜつ} 妙^{みよう} 一^{いち} 仏^{ぶつ} 量^{りよう} 進^{じん} 国^{こく} 照^{しやう} 土^ど 計^け

おしえのにわも 世に超えん
人みな奇しき 徳ありて
国第一とならしめん
われみほとけとなるとき
威神のきわみなかるらん
かくてはげみの 道すすみ
照りわたらん わがひかり
それらのさとに くまもなく
みなおしなべて もろともに
国とし国は あらんとも

諸^{しよ} 譬^ひ 堅^{けん} 不^ふ 斯^し 供^く 数^{しゆ} 無^む 百^{ひやく} 仮^け
 仏^{ぶつ} 如^{によ} 正^{しやう} 如^{によ} 等^{とう} 養^{やう} 如^{によ} 量^{りやう} 千^{せん} 使^し
 世^せ 恒^{ごう} 不^ふ 求^ぐ 諸^{しよ} 一^{いつ} 恒^{ごう} 大^{だい} 億^{おく} 有^う
 界^{かい} 沙^{じゃ} 却^{きやく} 道^{どう} 仏^{ぶつ} 切^{さい} 沙^{じゃ} 聖^{しやう} 万^{まん} 仏^{ぶつ}

数^{かず}かぎりなき みほとけの
 浜^{はま}のまきごの それのごと
 願^{ねが}いはたさん わがこころ
 火^ひをも過^すぎつ ついと堅^{かた}き
 たゆまず絶^たえじ 世^よにみつる
 道^{みち}をもとめて いやすすみ
 供^く養^{やう}すとても しかじなお
 世^よにいまさんを あますなく
 その数^{かず}多^{おほ}き ほとけたち
 恒^{ごう}伽^がの河^{かわ}の 砂^{すな}のごと

為^い 一^{いつ} 普^ふ 吾^ご 智^ち 如^{にょ} 戒^{かい} 布^ふ 靡^み 過^か
作^さ 切^{さい} 行^{ぎやう} 誓^{せい} 慧^え 是^ぜ 忍^{にん} 施^せ 不^ふ 度^ど
大^{だい} 恐^く 此^し 得^{とく} 為^い 三^{さん} 精^{しやう} 調^{じやう} 解^げ 生^{しやう}
安^{あん} 懼^く 願^{がん} 仏^{ぶつ} 上^{じやう} 昧^{まい} 進^{じん} 意^い 脱^{だつ} 死^じ

まよえる海^{うみ}を わたしては
さとのりの岸^{きし}に 着^つかしまん
ほどこし・おきて・つつしみや
しのび・はげみに 定^{じやう}と智^ち慧^え
菩薩^{ぼさつ}の行^{ぎやう}を いそしみて
世^よにすぐれたる 仏^{ぶつ}たらん
われ誓^{ちか}うらく さとりえて
ひろくこの願^{がん} はたしなば
おそれなやめる もろびとの
憩^いいの家^{いえ}と ならんかな

齊^{さい} 願^{がん} 震^{しん} 光^{こう} 智^ち 功^く 神^{じん} 人^{にん} 世^せ 無^む
 聖^{しょう} 我^が 動^{どう} 明^{みょう} 慧^え 勲^{くん} 徳^{とく} 雄^の 尊^{そん} 明^{みょう}
 法^{ほう} 作^さ 大^{だい} 威^い 深^{じん} 広^{こう} 無^む 師^し 永^{よう} 欲^{よく}
 王^{おう} 仏^{ぶつ} 千^{せん} 相^{そう} 妙^{みょう} 大^{だい} 量^{りょう} 子^し 無^む 怒^ぬ

徳^{とく}の法^{ほふ}王^{おう}にひとしくて
 われ願^{ねが}わくは仏^{ぶつ}となり
 大千^{だいせん}界^{かい}もうちふるう
 ひかりの力^{ちから}かぎりなく
 み智^ち慧^えはふかくたえにして
 そのいさおしはひろやかに
 不思議^{ふしぎ}の徳^{とく}のきわもなき
 ひとびとの雄^お者^さ獅子^{しし}のごと
 仰^{おほ}ぐほとけにたえてなし
 無^む明^{めい}と欲^{よく}と怒^{いか}りとは

究^く 窮^ぐ 諸^{しよ} 深^{じん} 殊^{しゆ} 威^い 三^{さん} 戒^{かい} 響^{こう} 正^{しやう}
 其^ご 深^{じん} 仏^{ぶつ} 諦^{たい} 勝^{しょう} 徳^{とく} 昧^{まい} 聞^{もん} 流^る 覺^{がく}
 涯^{がい} 尽^{じん} 法^{ほう} 善^{ぜん} 希^け 無^む 智^ち 精^{しやう} 十^{じつ} 大^{だい}
 底^{たい} 奥^{のう} 海^{かい} 念^{ねん} 有^う 侶^{りよ} 慧^え 進^{じん} 方^{ほう} 音^{おん}

はて^てな^なき^き底^そを^を念^{ねん}じ^じま^ます
 深^{ふか}き^きを^をき^きわ^わめ^め奥^{おく}つ^つく^くし
 法^{のり}の^のわ^わだ^だつ^つみ^み分^わけ^け入^いり^りて
 あ^あき^きら^らか^かに^によ^よく^くみ^みほ^ほと^とけ^けの^の
 た^たえ^えに^にす^すぐ^ぐれ^れて^てお^おわ^わし^しま^ます
 た^たけ^けき^きみ^み徳^{とく}の^のな^なら^らび^びな^なく^く
 し^しず^ずけ^けき^きこ^ころ^ろさ^さと^とき^き智^ち慧^え
 い^いま^まし^しめ^め・ま^まな^なび^び・い^いそ^そし^しみ^みや^や
 あ^あま^まね^ねく^く十^じ方^{ほう}に^にひ^ひび^びく^くなり^{なり}
 さ^さと^とり^りの^のみ^みこ^こと^と高^{たか}ら^らか^かに^に

超^{ちやう} 如^{によ} 猶^ゆ 皆^{かい} 珠^{しゆ} 日^{にち} 無^む 如^{によ} 威^い 光^{こう} 讚^{さん}
 世^せ 来^{らい} 若^{にやく} 悉^{しつ} 光^{こう} 月^{がつ} 与^よ 是^ぜ 神^{じん} 顔^{げん} 佛^{ぶつ}
 無^む 容^{よう} 聚^{じゆ} 隱^{おん} 焰^{えん} 摩^ま 等^{とう} 焰^{えん} 無^む 巍^ぎ 偈^げ
 倫^{りん} 顔^{げん} 墨^{もく} 蔽^{ぺい} 耀^{りやう} 尼^に 者^{しゃ} 明^{みやう} 極^{ごく} 巍^ぎ

世^よに^に超^こえ^えま^まし^して^て た^たぐ^ぐい^いな^なく
 世^せ自^じ在^{ざい}王^{おう}の^の お^おん^んす^すが^がた^た
 さ^さな^なが^がら^ら墨^{すみ}の^の ご^ごと^とく^くな^なり
 み^みな^なこ^こと^とご^ごと^とく^く 蔽^{おほ}わ^われ^れて^て
 宝^{たから}の^の 玉^{たま}の^の か^かが^がや^やき^きも
 月^{つき}日^ひの^の ひ^ひか^かり^り か^かげ^げか^かく^くし
 ひ^ひと^とし^しき^きも^もの^の な^なか^かり^りけ^ける
 炎^{ほのお}と^とも^もえ^えて^て あ^あき^きら^らけ^けく
 み^みい^いず^ずか^かし^しこ^こく^くき^きわ^わも^もな^なし
 光^{ひかり}か^かが^がや^やく^く か^かお^おば^ばせ^せよ

■ 讃仏偈（さんぶつげ）

『仏説無量寿経（ぶつせつむりようじゅきょう）』の上巻にある讃歌（さんか）で、定例札拝で歌う「さんだんのうた」は初めの部分の意訳です。

はるか昔に仏とられた阿弥陀如来（あみだによらい）は、すべての苦悩のひとを救うため法蔵菩薩（ほうぞうぼさつ）として現れ、師である世自在王仏（せじざいおうぶつ）の説法とその光輝く姿を讃え、自らも智慧と慈悲にあふれた仏になりたいと願われました。そして、すべての人びとをさとりの世界に導くまでは、たとえ苦難の中に沈もうとも決して後悔することはない、と誓われています。

宗教教育ガイドブック

ふんだリーか

平成 8 年 3 月 31 日 第 1 刷

令和 5 年 3 月 31 日 第 23 刷

日本音楽著作権協会(出)許諾第 230202051-01 号

編集・発行 兵庫大学・兵庫大学短期大学部

宗教教育推進委員会

学長室

〒675-0195 加古川市平岡町新在家 2301

Tel:079-427-5111(代表)



ありがとうのプロフェッショナルへ。



兵庫大学